

「主は皆さんとともに」「またあなたとともに」

■「入祭の歌が終わると、司祭は自席で立ち、会衆全体とともに十字架のしるしをする。それから司祭は、集まった共同体にあいさつをして、主の現存を示す。このあいさつと会衆の応答は、ともに集まった教会の神秘を表わす。」（「ローマミサ典礼書の総則 50」）

■「教会は、キリスト信者が、部外者あるいは無言の傍観者としてこの信仰の神秘に列席するのではなく、儀式と祈りを通してこの神秘をよく理解して、意識的に、敬虔に、行動的に聖なる行為に参加し、神のこばによって教えられ、主の御からだの食卓で養われ、神に感謝し、ただ司祭の手を通してだけではなく、司祭とともに汚れのないいけにえをささげて自分自身をささげることを学び、キリストを仲介者として、日々神との一致と相互の一致の完成に向かい、ついには神がすべてにおいてすべてとなるよう細心の注意を払っている。」

（ 第二バチカン公会議「典礼憲章 48」 ）

■「例えば、一番議論されていた『主は皆さんとともに』という司祭の言葉に答えるのは『司祭とともに』ではなく『あなたとともに』です。この言葉は意味深いです。司祭としてのミサの役割と、一般の信徒のミサの中での祭司職の実現ですから・・・」

（ 「福音宣教 2022年1月号 51頁」 ）

■「現行版の『また司祭とともに』の『司祭』は『祭儀を司る者』の意味で採用された訳でした。しかしながら、司教や助祭に対して唱えるときには違和感があるという意見があり、再検討されました。ラテン語規範版の直訳では『またあなたの霊とともに』となりますが、『あなたの霊』では身体を離れた靈魂を連想させるなど意味がつかみにくいため、諸外国や他教派の式文も参考にして、これを聖書的語法に基づく全人的な表現と受けとめ、『あなた』とする訳が採用されました。同様の変更は、福音朗読の前、叙唱の前、平和のあいさつ、派遣の祝福にもあります。」（ 「新しい『ミサ式次第と第一～第四奉献文』の変更箇所 16頁 日本カトリック典礼委員会」）

■ 「応答の『あなた』は個人ではなく、『共同の益のために、叙階の秘跡を通してあなたが受けた恩恵、この祭儀において今、それが現実のものとなるようわれわれが求めている恩恵と共に』（イブ・コンガール）という意味の『あなた』である、という理解が大切となります。この応答は奉仕『者』というより奉仕『職』の尊厳に向けられたものとなっています。

このように『このあいさつと応答は、ともに集まった教会の神秘を表わす』対話句としてその重要性を持っています。ミサは人間的な集会やイベントではなく『信仰の祭儀』であることを再確認したいと思います。」（ 「カトリック新聞 2021年12月26日号」
）